

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」は、三つ隣の305号室に引越してきた「くま」に誘われて、散歩のようなハイキングのようなものに出かけた。

川原までの道は水田に沿っている。舗装された道で、時おり車が通る。どの車もわたしたちの手前でスピードを落とし、徐行しながら大きくよけていく。すれちがう人影はない。たいへん暑い。田で働く人も見えない。くまの足がアスファルトを踏む、かすかなしやりしやりという音だけが規則正しく響く。

暑くない？ と訊ねると、くまは、

「暑くないけれど長くアスファルトの道を歩くと少し疲れます」

と答えた。

「川原まではそう遠くないから大丈夫、ご心配くださってありがとうございます」

続けて言う。さらには、

「もしあなたが暑いのなら国道に出てレストハウスにでも入りますか」

などと、細かく気を配ってくれる。わたしは帽子をかぶっていたし暑さには

強いほうなので断ったが、もしかするとくま自身が一服したかったのかも知れない。しばらく無言で歩いた。

遠くに聞こえはじめた水の音がやがて高くなり、わたしたちは川原に到着した。たくさん泳いだり釣りをしたりしている。荷物を下ろし、タオルで汗をぬぐった。くまは舌を出して少しあえいでいる。そうやって立っている、男性二人子供一人の三人連れが、そばに寄ってきた。どれも海水着を着けている。男の片方はサングラスをかけ、もう片方はシュノーケルを首からぶら

さげていた。

「お父さん、くまだよ」

子供が大きな声で言った。

「そうだ、よくわかったな」

シュノーケルが答える。

「くまだよ」

「そうだ、くまだ」

「ねえねえくまだよ」

② 何回かこれが繰り返された。シュノーケルはわたしの表情をちらりとうかがったが、くまの顔を正面から見ようとはしない。サングラスのほうは何も言わずにただ立っている。子供はくまの毛を引っ張ったり、蹴りつけたりしていたが、最後に「パーンチ」と叫んでくまの腹のあたりにこぶしをぶつけてから、走って行ってしまった。男二人はぶらぶらと後を追う。

「いやはや」

しばらくしてからくまが言った。

「小さい人は邪気がないですなあ」

わたしは無言でいた。

「そりゃいろいろな人間がいますから。でも、子供さんはみんな無邪気ですよ」

そう言うと、わたしが答える前に急いで川のふちへ歩いていってしまった。

小さな細い魚がすいすい泳いでいる。水の冷気がほてった顔に心地よい。よく見ると魚は一定の幅の中で上流へ泳ぎまた下流へ泳ぐ。細長い四角の辺をたどっているように見える。その四角が魚の縄張りなのだろう。くまも、じっと水の中を見ている。何を見ているのか。くまの目にも水の中は人間と同じに見

えているのであろうか。

突然水しぶきが上がり、くまが水の中に **A** 入っていった。川の中ほどで立ち止まると右掌をさつと水にくぐらせ、魚を掴み上げた。岸辺を泳ぐ細長い魚の三倍はありそうなものだ。

「驚いたでしょう」

戻ってきたくまが言った。

「おことわりしてから行けばよかったです、つい足が先に出てしまいました。大きいでしょう」

くまは、魚をわたしの目の前にかざした。魚のひれが陽を受けてきらきら光る。釣りをしている人たちがこちらを指さして何か話している。くまはかなり得意そうだ。

「さしあげましょう。今日の記念に」

そう言うと、くまは担いできた袋の口を開けた。取り出した布の包みの中からは、小さなナイフとまな板が出てきた。くまは器用にナイフを使って魚を開くと、これがかねて用意してあったらしい粗塩をぱっぱと振りかけ、広げた葉の上に魚を置いた。

「何回か引っくり返せば、帰る頃にはちょうどいい干物になっています」

何から何まで行き届いたくまである。

わたしたちは、草の上に座って川を見ながら弁当を食べた。くまは、フランパンのところどころに切れ目を入れてパテとラディッシュをはさんだもの、わたしは梅干し入りのおむすび、食後には各自オレンジを一個ずつ。ゆつくりと食べおわると、くまは、

「もしよろしければオレンジの皮をいただけますか」

と言ひ、受け取ると、わたしに背を向けて、急いで皮を食べた。

少し離れたところに置いてある魚を引っくり返しに行き、ナイフとまな板とコップを流れて丁寧<sup>ていねい</sup>に洗い、それを拭き終えると、くまは袋から大きいタオルを取り出し、わたしに手渡した。

「昼寝をするときにお使いください。僕はそのへんをちょっと歩いてきます。もしよかったらその前に子守歌を歌ってさしあげましょうか」

真面目に訊く。

子守歌なしでも眠れそうだとわたしが答えると、くまはがっかりした表情になったが、すぐに上流のほうへ歩み去った。

目を覚ますと、木の影が長くなっており、横にくまが寝ていた。タオルはかけていない。小さくいびきをかいている。川原には、もう数名の人しか残っていない。みな、釣りをする人である。くまにタオルをかけてから、干し魚を引っくり返しにいくと、魚は三匹に増えていた。

「いい散歩でした」

くまは305号室の前で、袋から鍵を取り出しながら言った。

「またこのような機会を持ちたいものですな」

わたしも頷いた。それから、干し魚やそのほかの礼を言うと、くまは大きく手を振って、

「とんでもない」

と答えるのだった。

「では」

と立ち去ろうとすると、くまが、

「あの」

と言う。次の言葉を待ってくまを見上げるが、**B** して黙っている。ほ

問二 — 線②「何回かこれが繰り返された」とあるが、子供がお父さんに

何度も「くまだよ」と言う理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 動物園以外でくまを見られることに感動するあまり、一度言っただけをすぐに忘れてしまっているから。

イ 目の前にくまがいることにお父さんが恐怖を感じていて、自分の言葉が届いていないと思ったから。

ウ くまに対する驚きや興奮をお父さんと共有したかったのに、思うような返事が返ってこなかったから。

エ お父さんが他のことに気を取られていて、自分の言うことに対して適当な返事しかしてくれないから。

問三 **A** ・ **B** に入る語として適切なものを次の中から一つ選び、

それぞれ記号で答えなさい。

ア もじもじ      イ すいすい      ウ こわこわ  
エ おろおろ      オ ざぶざぶ      カ ぐずぐず

問四 — 線③「つい足が先に出てしまいました」とあるが、くまは自分の

どのような性質が表れたと説明したいのか。答えなさい。

問五 — 線ア〜エの中で一つだけ働きが違うものを選び、記号で答えなさい。

を答えなさい。

問一 — 線①「もしかするとくま自身が一服したかったのかもしれない」

という考えが正しいと判断できる証拠となる一文を探し、初めの四字

(川上弘美『神様』)

問六

——線④「くまにタオルをかけて」とあるが、「わたし」は「くま」をどのような存在だと思っているか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア すぐに風邪をひいてしまうか弱い存在。
- イ 気配りをしなければならぬ目上の存在。
- ウ いびきのうるさい少しわずらわしい存在。
- エ 自分と変わらない、人間と同等の存在。

問七

——線⑤「眠る前に少し日記を書いた」について、「わたし」になつたつもりで日記を書きなさい。ただし、次の条件に従うこと。

- A 最も印象に残った出来事を挙げる。その理由も書くこと。
- B 「くま」に対して「わたし」が抱いている気持ちを書くこと。
- C 八十字以上、百二十字以内で書くこと。ただし、出だしの一マスは空けないで書くこと。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お母さんと赤ちゃんは、みな仲が良さそうにみえます。生まれてずっと一緒にいると、自然と仲良くなるのでしょうか。

生まれてからの赤ちゃんとお母さんの行動を丁寧<sup>ていねい</sup>に観察した研究から、  
X ことがわかってきました。赤ちゃんとお母さんは、生まれつきウマが合うわけではないのです。

赤ちゃんがお母さんの目を見る時間と、お母さんが赤ちゃんの目を見る時間を、生まれた直後から観察すると、発達的な変化<sup>①</sup>がみられたのです。赤ちゃんの注視時間だけでなく、お母さんの注視時間も、だんだんと長くなっていったのです。赤ちゃんの発達は先に説明した通りで、視線の発達とともに、新生児の開いた目への好みから、視線の合った目へと、視線を見る感度も高まり、自然と目を見る時間は長くなっていくのです。

それに合わせてお母さんも発達することが、データの中からわかったのです。赤ちゃんの目を追うスキルがアップしていくのです。お母さんは、最初からお母さんになれるわけではなく、子育てしていくうちにお母さんになっていくのです。

自分のほうをぼんやりと見ていた赤ちゃんが、自分の目をしっかり見てくれるようになる、そんな変化が子育てのご褒美<sup>ほづめ</sup>となって、お母さんのやる気を湧<sup>わ</sup>き立たせるのです。そしてだんだんと、赤ちゃんとお母さんの息は合っているのです。

(中略)

赤ちゃんを産んだらそのまま親になれる——そんなわけではないことがわかりました。赤ちゃんとのやり取りの中で、親も成長するのです。a、親の成長は赤ちゃん時代に限られるものではありません。みなさんの親も、今でもみなさんと一緒に、成長を続けていることでしょう。

赤ちゃんの話に戻ると、親子の視線は、コミュニケーションの大切な土台となることがわかっています。これまでみてきた赤ちゃんの視線の読み取りは、単に開いている目やこっちを見ている目に注目するだけで、私たちの視線の読み取りと比べると、幼稚<sup>ちうい</sup>に思えます。A  
私たち大人にとって、視線にはたくさんの意味が込められています。見つめられてドキツとしたり、なんらかの意図を感じたり、さまざまな感情を伴います。視線に意図を読み取ることは、いつ頃からできるのででしょうか。親子で行き交う視線の巧み<sup>たくみ</sup>なトレーニングが、そこにあるようです。

新生児には意図を読み取る術<sup>すべ</sup>はありませんが、一歳<sup>さい</sup>になるよりも早く、生後一〇か月頃からすでに、相手の意図らしきものを読み取るようです。言葉を話すようになるのが一歳半から二歳頃であるのと比べると、会話をするよりも以前に、相手の意図がわかるのです。それはとても早い発達ともいえます。B

生後一〇か月の赤ちゃんは抱っこされているお母さんの顔を覗<sup>のぞ</sup>き込み、その顔色<sup>②</sup>をうかがって、自分の行動を決めることが実験からわかっています。ガラス板の下に崖<sup>がけ</sup>が見える怖い場所に座らせても、お母さんが微笑<sup>ほほえ</sup>んでいるとそのまま崖の上に渡されたガラス板の上を進んでいきます。b お母さんが怖い顔をしていると、進まずにその場に留まったのです。お母さんの表情から、自分の状況を判断することができたのです。C

生後六か月になると、注意は視線の先へと進むようです。相手が見ている対象を気にしだすのです。赤ちゃんの興味の対象は、鳥のように目そのものでは

なくて、目から離れていくのです。それは動物から人への進化を示すような、劇的な変化ともいえましょう。

目から先の世界には、少しずつ進んでいきます。まずは「共通理解」の場へと進みます。生後九か月頃になると、親と子とで互いにひとつの物を見つめ合うようになるのです。お母さんの視線の先に注目し、そこに新しい玩具があったりお菓子があつたりするのに気づき、その対象を確認しあうことができるのです。ひとつの世界を互いの視線によって共有することは、人間だけが持つ共通の認識世界を生み出すこととなります。これもさらなる進化の予感を感じさせる行動です。D

やがて「視線の先」から「指の先」へと、認識世界の共有は移行します。指さしを通じて、一つひとつの物体を互いに確認しあい、「これがお母さん」「これがマンマ」と、言葉を教えることができるのです。人類だけが持つ「言葉」の獲得へとつながっていくのです。言葉の通じなかった赤ちゃん時代の終わりが近づく兆候です。

目は自身の器官を通じ、外界に自分を広げる窓のようなものなかもしれませんが。赤ちゃんは母親との視線の共有によって、自分だけの閉じられた世界から脱却し、他者と共有した世界に発達していくようです。言葉を含めたコミュニケーション能力の獲得には、とにかくまずは視線や目が、大切な役割を果たしていることでしょう。そうであれば、あなた自身の視線が他者に開かれているかを知ることが、大切なことかもしれません。

(中略)

大人になるにつれて、顔や視線を見る際に複雑な感情が伴うようになります。

問三 a・b に入る言葉として適切なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ところが イ では ウ もちろん  
エ だから オ たとえば

問四 線②「顔色をうかがって」の「顔色」の意味として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 感情 イ 評価 ウ 好意 エ 嫌悪

問五 線③「それ」の指す内容について「こと。」に続く形で二十字以内で答えなさい。

問六 線④「相手との関係を前提とした感情がつくり出されます」についての説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のしたいことを通すために本心とは違う感情を持ったふりをする。  
イ 自分の今の気持ちにふさわしい表情をとることが常に得であると理解する。  
ウ 自分は悲しくなくても相手の気持ちに合わせて泣くことができる。  
エ 本当は嬉しいのに自分の気持ちを知られたくなくてもじもじしてしまう。

顔を見たり、顔を見せたりすることには感情が切り離せないのですが、その感情が複雑になっていくのです。生まれたばかりの赤ちゃんは、泣いたり怒ったりといった単純な感情の噴出を見せるだけですが、やがて、感情を隠したりわざと見せて、相手との関係の調整に感情を使うようになります。はにかみや恥じらい、わざと泣いて見せるとか、相手との関係を前提とした感情がつくり出されます。

(山口真美『自分の顔が好きですか?—「顔」の心理学』)

※1 先に説明した通りで……新生児は成長に従って、目を閉じた人の顔よりも目を開いている人の顔、さらには自分と視線があっている人の顔を好むようになるといった内容が先に記されている。

2 認識……人間が物事を知る働きとその内容。

3 兆候……何かが起こると思わせる前ぶれ。きざし。

問一 X に入る語として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 意外な イ 皮肉な ウ 最新の エ 当然の

問二 線①「変化」について次の(1)(2)に答えなさい。

- (1) どのような「変化」がみられるのか、三十字以内で答えなさい。  
(2) (1)によってどのような結果がもたらされるのか、本文中から十七字で書きぬきなさい。

問七 次の段落は本文のA、Dのどこに入るものか記号で答えなさい。

では、赤ちゃんの注意が、お母さんの目から離れて外界へと移るの  
は、いつ頃でしょうか。

問八 本文で示された赤ちゃんの発達の順序について適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母親と視線を交わしあう ↓ 母親と同じ対象を確認しあう  
↓ 母親の表情から状況を判断する ↓ 言葉を獲得する ↓  
視線の先の世界に関心を向ける  
イ 母親と視線を交わしあう ↓ 視線の先の世界に関心を向ける  
↓ 母親と同じ対象を確認しあう ↓ 母親の表情から状況を判断する  
↓ 言葉を獲得する  
ウ 母親と同じ対象を確認しあう ↓ 母親と視線を交わしあう ↓  
母親の表情から状況を判断する ↓ 視線の先の世界に関心を向ける  
↓ 言葉を獲得する  
エ 母親と同じ対象を確認しあう ↓ 母親の表情から状況を判断する  
↓ 母親と視線を交わしあう ↓ 視線の先の世界に関心を向ける  
↓ 言葉を獲得する

次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

何んにもしたくない日 久保克児

片づけなければならぬことは山ほどある

何をする気も起こらない

ご飯を食べるのも億劫（いちめつ）な日

作文なんてとてもものに書けない

もう一度ベッドにひっくり返る

やがて 1 から指令が届く

外に出（い）よ歩け

そうだった

一時間目は体育の時間だった

指令にしたがい外に出る

やっぱり外は気持ちがいい

腕（うで）をぐるぐるまわしながら

深呼吸をしながら

いつもの道をいつものように歩きはじめる

そうかそうか

もう花菖蒲（はなしょうぶ）の季節なのだ

水際に初（はつ）ういしく立つ黄の花ばなが

目にやさしい

チチツチツと啼（な）いて遊ぶ番（つがひ）のセキレイの

せわしく動く足に目が釘（くぎ）付（つけ）に

ひとときわ濃（こ）くなった緑に映（は）えて  
紋白蝶（もんぱく）が舞（ま）う

あら

いつの間にか

① 体育の時間が自然観察の時間に

うつすら身体が汗ばんでくる

あれあれ

今度は頭の中が考（かん）えるモードになってきたみたい

大きな荷物を足元に置き

青い空をじっと見つめる若者がいる

大声で唱歌（うた）を歌いながら歩く人と

橋の上ですれ違（ちが）う

世の中は考（かん）える材料でいっぱいだ

② ③ とつおいつとりとめもなく考（かん）えながらなお歩く

とそのときだ

なんと

だしぬけに言葉が降（お）ってきた

何んにもしたくない日

やった

これだこれだこれが書きたかったんだ実は

何んにもしたくない日をどうしのぐ

③ こいつは何度でもやってくる

ばんざい

やっと国語の時間だ

※ テンションは一気に上昇

わあい作文だ作文だ

目に入るものみんなに挨拶（あいさつ）をしたくなるのを

ぐつとこらえて

さてまずは

家に帰（か）って

2

※ 1 億劫（いちめつ）……気乗りがせず、めんどろくさいこと。

2 唱歌……学校教育用の歌。

3 とつおいつ……考（かん）えが定まらず、あれこれと思いまようさま。

4 テンション……気分や気持ち。

問一 1 に入る語として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア テレビ
- イ 耳
- ウ 父親
- エ 脳

問二 線①「体育の時間が自然観察の時間に」とはどういう状況を説明しているか、簡潔に説明しなさい。

問三 線②「考える材料」として具体的に挙げられているものを詩中から二つ、過不足なく書きぬきなさい。

問四 線③「こいつ」が指すものを詩中から書きぬきなさい。

問五 2 に入るものとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作文を書きますか
- イ ご飯を食べますか
- ウ ベッドで寝ましょうか
- エ 部屋を片づけましょうか

問六 この詩に関する説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「体育の時間」「国語の時間」など作者の状態を学校の授業にたとえることで、表情からは読み取れない裏に隠（かく）れている思いを伝わりやすくしている。
- イ 「あら」「なんと」「やった」「ばんざい」など感情を表す短い語を詩の間にはさむことで、作者の心の動きがはつきり伝わる。
- ウ 「黄の花ばな」「濃（こ）くなった緑」「紋白蝶」「青い空」など色に関わる表現を対比的に用いることで、詩全体に明るい雰囲気（ふんいき）をもたらしめている。
- エ 「そうかそうか」「これだこれだ」「作文だ作文だ」など同じ言葉を反復することで、作者が冷静に状況を判断していることが感じられる。

四

次の各問いに答えなさい。

問一 次の「四字熟語」の（ ）には「数字」を表す漢字が入るが、それが単純に「数」を表すとしたら、全部足すといくつになるか「算用数字」で答えなさい。

( ) ( ) 日 ( ) ( ) 秋 ( ) 再 ( ) ( ) 再 ( ) ( )

問二 次の「慣用句」のそれぞれの（ ）の中には、同じ漢字が入る。その漢字を答えなさい。

( ) ( ) 配せをする ( ) ( ) がない  
うの ( ) ( ) たかの ( ) ( )

問三 次の中で、日本語として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 僕の将来の夢はパイロットになりたいと思っています。
- イ 問題が難しければ、難しいほど、やる気が出てくる。
- ウ 夏休みに富士山に登ったが、美しい風景に感動した。
- エ 昨日は朝から雨もようだったので、折りたたみのかさを持っていった。

問四 次の「慣用句」をつかって、文を作りなさい。

※慣用句の内容が具体的にわかるようにしなさい。

慣用句の例「足がぼうになる」

(悪い例)「ぼくは、足がぼうになった。」

(良い例)「ぼくは、落とし物をしてしまい、足がぼうになるまで

探し回った。」

※「動きを表す語」など、後に続く語によって形が変わる場合は、変えても良いです。

(例)「あるく」↓「あるいた」

「腹を割る」

五

線部の平仮名を漢字に直しなさい。

- 1 色々な国とぼうえきする
- 2 不思議な自然げんしょうが起こった
- 3 問題点のまいきよにいとまがない
- 4 あつい友情が描かれた物語を読む
- 5 銀行にお年玉をよきんする



